

## 第 21 期第 6 研究

### 近世から近代に至る日本伝統文化の分野横断的研究とデータサイエンス教材への活用

研究代表者 福田 智子

本研究の目的は、近世から近代にかけて製作された同志社大学所蔵の歌留多や図絵、伝書等の史料を中心に、文学・語学・歴史・雅楽・儀礼・美術・芸道といった多角的な視点から研究することにより、各分野相互の関連性の中に、日本における伝統文化享受のあり方を再構築することである。文化系学問分野の学際的な研究である。

と同時に、研究代表者が文化情報学部・文化情報学研究科に所属していることもあり、文理融合研究をも目指している。すなわち、テキストや図柄を比較・分類し、周辺史料との類似点や影響関係の発見を容易にするため、それらの情報を集積したデータセットを整備することも視野に入れているのである。その成果は、文系学生を対象とするデータサイエンス教材にも活用可能であると考えている。

データ・サイエンス【data science】とは、「データの分析についての学問分野。統計学、数学、計算機科学などに関連し、主に大量のデータから、何らかの意味のある情報、法則、関連性などを導き出すこと、またはその処理の手法に関する研究を行う。これらの研究者および技術者はデータサイエンティストとよばれる。」(デジタル大辞泉 ©SHOGAKUKAN Inc.)と定義され、現在は、文系の学生もある程度学ばなければならない学問分野となった。

だが、現時点でのデータサイエンス科目は、実証的な文化系学問との“相性”が必ずしもよいとは限らないのではないだろうか。用例を数値化しただけで終わってしまう。あるいは、大多数の、少し考えただけでも思いつく当たり前のことを、「新規性」の名のもとに主張する。こういったことが起こってはいないだろうか。

本来、実証的なデータ分析を行う場合、用例を数値化したら、それを再度、文脈に戻す。具体と抽象との間を何度も往復することによって、新たな、そして意外な発見をする醍醐味が得られる。データサイエンスを用いれば、今までよりも大量で複雑なデータを視野に入れることができるので、新たな、そして意外な発見をする醍醐味を味わえる可能性も広がるはずである。

文化系の実証的な研究とデータサイエンスとの関わりについて、以上のような懸念と可能性を抱くのは、文化系研究者だけではない。情報系研究者との連携によって得られる本研究での成果が、教育コンテンツとしても、現状に一石を投じることができれば幸いである。

なお、本研究会の活動には、研究会・ワークショップ・調査・投稿の 4 つの柱がある。2023 年度はとくに、薫物作成ワークショップを季節に合わせて 4 回にわたり行った。主として同志社大学・同志社女子大学の学生を対象としたものであったが、Twitter や Facebook に企画を掲載したところ、一般の方々のなかにも、このような企画のニーズが一定数あることを知った。人文科学研究所のこのような対外的な活動は、今後も引き続き行っていく必要があると強く感じている。